

人位が倒れるのか、みんな無事で頑張ろうね、と心に祈りながら作業仕度を丁寧に整えて行く。

あれから五十年。家族も嘘を言っていると初めのうちは言っていたが、今では信じてくれるようになった。異国の荒野に屍をさらしているであろう戦友達の冥福を祈るこの頃である。

満州―シベリア―故里への道

新潟県 関川 信 二

大東亜戦争末期、満州国法人「鶴岡炭鉱株式会社」(社長日産コンツェルン総裁鮎川義介)に勤務し、その子会社へ出向、ソ満国境近くで国策に沿って懸命に頑張っていた私は、二十年八月九日国籍不明の偵察機と思われる飛行機が、会社上空を旋回しながら北方へと飛び去って行った。戦雲急を告げる情況は毎日のラジオ放送でそれとなく理解していたものの、一抹の不安感に襲われた。

案の定、翌八月十日関東軍司令部からの非常召集令状(俗に言う赤紙)が届けられた。社長からの呼び出しが来て本社へと向かった。「在満在郷軍人総動員令が出た。君はわが社の在郷軍人分会長、家族のことは引き受けるから会社の在郷軍人全員引率して、牡丹江の軍司令部へ直行してくれ、会社は残った社員、家族全員社長が引率して新京へ引き揚げる。会社は終わりとなる。後のことは心配するな」と言われたので、その足で社宅へと向かった。懐かしく、想い出多いこの風景も見納めになるのかな、と玄関の前で暫くは付近の自然を眺めて扉を開いて中へと入った。

どうなる、と聞く妻に向かって、「小学校一年の長女を頭に四人の子供達と共に本社へ行き他の社員家族と共に新京へ行きなさい。自分は在郷軍人分会長として社の在郷軍人百人を引率し、集合場所の牡丹江の軍司令部へ行く、今度会うのは故里新発田になると思う」とその日、ありったけの馳走をし、家族水入らずの中でしばしの別れを惜しんだ。

翌朝妻子と別れを告げ、社の在郷軍人百名と共に列

車で牡丹江の軍司令部へと到着した。予備役陸軍主計中尉が私の階級。早速に、他地から召集された百名を合わせ、計二百名で鶴岡隊と命名され、私以外には軍医の中尉しか将校がいないので隊長にさせられたのである。北支事変―昭和十二年八月に第一回の召集を受けたので、今回が二回目の召集軍務となる。軍人は軍服と兵器が必要である。軍司令部の兵器委員会、被服部と廻って請求したが、そのそれぞれの兵舎は全く空っぽ、誰も居ない。あっけにとられた私は氣を取り直し守備部隊長の大佐（名前は忘却）にその旨を報告したら「応召姿の作業服でよい、兵器は何もないから木銃を携行せよ」という命令である。致し方なし、その旨を隊員に告げ守備位置について八月十五日を迎えたのである。十五日夕刻軍司令部からの命令で「直ちに牡丹江を出発、徒步行軍で北方の佳木斯に十八日夜迄に到着せよ」。驚いたが仕方がない。出来るだけの糧秣をそれぞれ携行し、一路佳木斯へと強行軍である。言われた通り十八日夕刻には全員佳木斯に到着、深夜軍司令部から命令が来た。「命令受領のため将校を

軍司令部に派遣せよ」とのこと、大佐と相談して軍医中尉を派遣した。暫くして軍医が青ざめた顔で帰隊し、この時初めて「降伏命令」が出たことを知ったのである。みんなガックリと項垂れ、これからどうなるか、との不安の念に駆られるのだった。歴史上かつてない「無条件降伏」である、八月十九日早朝武器を広場に持ち寄り一箇所にそれぞれを集積したところに、早くもソ連軍がやって来た。武器を点検し、整列した我々を一人ずつ離しながら身体検査を始めた。

腕時計、万年筆を全員から押収した後、牡丹江への兵舎行きが通訳から部隊長を通じて命令が下され、ソ連軍監視の下に行進、牡丹江兵舎に収容された。外出は一切許されない。九月一日になって「港のあるところへ行く、元気で歩け」の命令で、港へ向かうのは日本へ帰ることとうなずきながら一泊二日の強行軍、三日目にソ連領に入った。

トラックが来て乗車を命ぜられ、港へと思いきや山の中へと連行され、遠くからは兵舎かと思ったら、近くと丸太小屋、その中へ少しばかりの荷物を置くと、

翌日から自動小銃に小突かれながら早くも冬到来を思わせる原始の林へと伐採作業であった。

翌日になると何組かに労働部隊が混成されて牡丹江からの仲間は四散状態となったのである。いよいよくるものがくるか、と疑心暗鬼のなかでノルマが課せられ、ノルマが達成できないと責任者である私に重賞倉的な罰が課せられた。部下が助けようと努力すると自動小銃で脅かされ、止むなく引き下がっていく姿を格子の中から涙して眺めざるを得なかった。

足下に水が溜まり、丸太に乗っかり、格子にしがみつぎ、わずかばかりの黒パンにかじりつく状態、地獄図そのものである。

二十三年故里に帰ってみると、妻は二十一年八月帰国予定だったが港の検査で伝染病と診断され、新京の病院へ逆戻り、そこで命を落としたのである。病院にいた職員の方が実家に遺髪を届けてくれた。四人の子供達は可哀相にも引き揚げ途中全員、若い命を落としたとの伝言である。戦争は嫌だ。

シベリア鉄道は抑留者が復旧した

新潟県 山崎 清

部隊は満州第四一部隊、終戦は満州方正県方正、武装解除後は貨車に乗せられ鍵を掛けられると延々と一週間近く、一日に三回の食糧給与以外は罪は開かれなない。その三回が用便の唯一の機会である。時折りガタンと音がして停車しても付近を見ることができない。窮余の一策の言葉どおり、貨車内にあった金属片（八番線位の針金、その他）を集めて先端を平らにして、貨車の片隅に穴をあける。

辛抱強く交替交替で穴をあける作業を続ける。一日位かかって外を眺める、といっても一部分しか見えないが、光が入るだけでも良かった。床には各人停車しないときに用便できる位の穴を開けることができた。

監視のソ連兵も初めは「何事か」と銃を構えていたが、そのうちようやく理解したらしく、給食時には愛